

## —在り得るものを、在らしめる—

人間が存在するという事は、存在と呼ばれるものが成立する可能性を保証するにすぎないのであって、それというのは、存在と呼ばれるものは、われわれ自身がかたちづくったかたちにおいて所有されるものだからである。われわれが自然、存在、現実、世界などというときに意味しているいっさいのことがらは、人間によって開示されるのであって、人間にたいして開示されるものではないのである。

(フィードラー「芸術活動の根源」、山崎正和編『近代の芸術論』、中央公論新社、1980年、p. 139)

コンラート・フィードラー (Konrad Fiedler, 1841～1895) は「芸術活動の根源」のなかでこのように述べる。

フィードラーはカント的な立場に立ちつつ、所与的存在者を認める立場を素朴と退け、不明瞭な感性的所与を明瞭な意識の所有物とする方法として概念化とは別の道を示した。それが「描く」という行為である。

それはすなわち、質料としての所与に対する「手による形相の付与」である。流転する感性的領域に、描くことによって有一本質的存在者を在らしめるのだ。

その際それは言語から厳密に守られ、後に芸術の自律性として受け継がれていく。

しかし、現地的見地においてそのような峻別は可能だろうか。

世界の「文節＝生成」の仕方は、文化に固有の構造によって規定されている。そしてそのような構造の典型は、共時的差異の体系としての言語に見出すことが可能なはずだ。このように考える時、次のように言うことができる。すなわち、「言語と手は“共同”して世界を文節し、ひとつの現実を在らしめる」。

このように言語が介在することによって生じることとはなにか。手によって与えられるものが、ポジティブな本質ではなく、ネガティブな差異と化するということである。それは固定的なものではあり得ない。謂わば、「手による形相の貸与」である。

さて、本作において私は洞窟壁画の画像の上にさらに輪郭を引いて文節行為を行った。洞窟壁画とはもちろん人類最古の芸術である。すなわち——本稿の文脈に沿うならば——現存する人類最古の世界への文節行為の結果である。われわれは4万年前の言語を知らない。しかし、言語と手によるその文節の仕方は垣間見ることはできるのである。

そのような象徴的文節に対し自己言及的に文節を施すことによって、現実を在らしめるその作用そのものを前景化することを試みる。

思うに、近代における創造とは、絶対的に自由な主体としての作者による自由な創造であった。

とはいえそのようなオプティミステックな自由はもはやあり得ないだろう。そうなった時の自由や創造とはなにか。われわれが規定されているその当の構造を改変することによる自由と創造である。

われわれが言語に規定されつつ世界を文節して存在者を存在者足らしめているのならば、その文節を改変することこそが自由であり創造なのだ。

いまだ在らざる在り得るものを在らしめる働きとしての表現を肯定し、その潜在的形相を顕在化させる行為にメタ的に接近しつつ、私も表現を行いたい。

菊池遼